

# 生徒指導上の問題行動に対する支援についての一考察

## — 不登校生徒への支援の事例 —

田 邊 正 明

A consideration of the support for the problem behavior on the student guidance  
— Case study about the support for a truant student —

Masaaki TANABE

### 要 旨

本稿は、生徒指導上で最も困難かつデリケートな心の対応が必要な「不登校の男子生徒」に対しての中学校1年生から現在までの25年間にわたる『遊戯療法的対応』の実践記録である。長期にわたる遊戯療法的対応のプロセスや有効性等を男子生徒の成長過程に沿って整理したうえで考察を加えた。ただし、本人を特定できる部分やプライバシーに関わる部分については、本稿の趣旨が変わらない程度の変更をしている。

キーワード：不登校、長期支援、遊戯療法的アプローチ

## 1 はじめに

わたしは、本大学へ再就職する前は、小学校教諭を14年、三重県教育委員会や津市教育委員会の事務局職員を13年、小学校の管理職を10年歴任した。

その中で生徒指導上の課題で最も困難さを感じたものは、不登校の児童生徒への対応であった。対象児童生徒が、それぞれの在任中に、自ら成長して歩み出すところまで見届けることは殆ど出来なかった。本稿の事例は、対象生徒本人と家族及び学校の依頼で継続相談を続け自己成長まで見届けた数例の一つである。

## 2 研究の背景と目的

本稿は、三重県教育委員会で三重県総合教育センター職員として教育相談を担当した時から始まる。その後は、津市立教育研究所職員時代、小学校管理職時代、津市教育委員会幹部職員時代、本大学再就職時代に継続対応した「遊戯療法的対応」の実践記録である。

教育機関は、学校・教育相談所・教育センター等々でも、短ければ数回・数週間、長くても数年、最長でも義務教育終了ぐらいまでしか対応してもらえず、最終的には医療・心療の対応または見守るだけとなる。

本稿に登場する男子生徒と初めて会った時期は、三重県が全国一不登校の少ない県としてマスコミに取り

上げられた時であった。その後、三重県内にも不登校の適応指導教室が次々とでき、その教室支援を県教育委員会が推進していく時期であった。スクールカウンセラーも臨床心理士もいなく、教育相談センター職員が文部科学省の中央研修等により資格認定され、カウンセリング的対応の県内普及や理解・啓発が始まった時期でもあった。

現在も不登校児童生徒は増え続けている。平成25年度の長期欠席者（30日以上欠席者）のうち、不登校を理由とする児童生徒数は、小学校は2万4千人（前年度より3千人増加）、中学校は9万5千人（前年度より4千人増加）で、中学生では37人に1人で1学級に1人は存在する状況にある。

本稿の事例が、対応や支援としての是非、遠回りか近回りか、あるいは正攻法か変則的なのかは別にして、25年以上の長期間にわたる対応の記録は殆どない。また、思春期の各成長過程における支援を遊戯療法的手法で実践した事例も少ない。小学校高学年・中学校・高等学校・大学での不登校児童生徒・学生の対応や指導の参考になれば思い、まとめと考察をしたいと考えた。

## 3 遊戯療法的対応

### (1) 遊戯療法とは

遊戯療法とは「遊戯＝遊ぶこと」それ自体が治療で

ある（1979 ウィニコット）という考えや「遊び」は生まれ変わる性質や成長しつつある能力を持ち、遊びそのものに治療力がある（1981 エリクソン）という考えの元に、原則として、幼児（3～4歳）から児童期（11～12歳）まで子どもを対象に、遊びを主なコミュニケーション手段、および表現手段として行われる心理療法をいう。ただし、大人も遊びに従事することで、言語化では気づき得ないことに至ることができるとし、大人に対しても遊戯療法は実施される。

## （2）遊戯療法の場と道具

動的・身体的活動には、安全面に問題のない部屋が必要であるが、静的・言語的活動には、机や椅子のある比較的狭い部屋が適当である。

また、道具として、動的・身体的活動用には、刀、鉄砲、プラスチックバット、スポンジボール、トランポリン等が、静的・言語的活動用には、箱庭用具、文房具、ゲーム機器等が用意されている施設が多い。わたしは、「時刻表」「日本地図帳」「高校受験参考書・問題集」「大学受験ガイドブック」「アニメ専門雑誌」「就職情報誌」を準備した。

## （3）遊戯療法の8つの基盤（1959 アクスライン）

遊戯療法的対応でわたしが気を付けたことは、下記の8つの基本姿勢であった。特に、学校教育現場へ戻った際の実践では、「治療者を教師に」「治療を教育に」読み替えて、遊戯療法と教師が行う教育活動との共通点が浮き彫りにできる実践をした。

- ①治療者はできるだけ早くよいラポート（親和感）ができるような、子どもとのあたたかい親密な関係を発展させなければならない。
- ②治療者は子どもをあるがままに受け入れる。
- ③治療者は、子どもが自分の気持ちを完全に表現できるような自由感を味わえるように、その関係におおらかな気持ちをつくり出す。
- ④治療者は子どもの表現している気持ちを油断なく認知し、子どもが自分の行動の洞察が得られるようなやり方で子どもの気持ちを反射する。
- ⑤治療者は、子どもにそのようにする機会があたえられれば、自分で自分の問題を解決しうるその能力に深い尊敬の念をもっている。選択して、変化させる責任は子どもの責任である。
- ⑥治療者はいかなる方法でも、子どもの行ないや会話を誘導しようとはしない。子どもが先導するのである。治療者はそれに従うのである。
- ⑦治療者は治療をやめようとししない。治療は緩慢な過程であって、治療者はその緩慢な過程であることを認識している。

- ⑧治療者は、治療が現実の世界に根をおろし、子どもにその関係における自分の責任を気づかせるのに必要なだけの制限を設ける。

## 4 実践事例

### （1）対象生徒（A男）及び家族の状況

A男（中1=12）

父（38）母（37）妹（10）弟（7）祖父（65）

### （2）主訴及びA男の概要

- \*乳幼児期から小学校時代まで、全く問題なく不登校も欠席もトラブルもなく、順調に小学校を卒業し、中学校入学を心待ちにしていた。
- \*中学入学後2日目のクラブ活動紹介・体験の際、自分の希望するパソコン部が無いことを理由に、不登校になる（その日から1日も登校できず）。
- \*相談センターへ中学1年の9月初旬に来所する。
- \*無口だが、趣味の「電車」には反応して会話が出来たので、週1回のペースでA男とのマンツーマンの来所面談をすることをA男と決める。
- 母親も同意して、送り迎えをすることになった。

### （3）見立てと対応方針

- \*優等生の兄として頑張り過ぎてきたことによる、中折れ疲れ型不登校の仮説の見立てを所員のケース会議で決めた。
- \*心が疲れているのではないか、それなら電車の話をもとに、心の成長を図る「遊戯療法的対応」で面談を進めることに決めた。

### （4）遊戯療法的対応の実際

#### ☆第1期 紙上列車旅ゲーム（中1～中2）2

- \*準備物…時刻表
- \*面談頻度…週1回
- \*概要
  - ・初期…列車の名前や始発・終着駅名、〇〇本線や〇〇鉄道などを探したり、交互に質問・回答するゲーム
  - ・中期…津市からJRの有名駅までの時間と運賃を計算するゲーム
  - ・後期…津市から地図上の駅（無名駅）までの時間と運賃の少なさを競うゲーム
- \*所感
  - どの時期のゲームも集中して取り組み、ゲームの課題を宿題にしたり、治療者が困るようなゲームの質問を考えてくるようになった。
  - ゲーム中やゲーム後のコミュニケーションは弾

み、時々今の自分の心の状態を語ってくれた。

#### ☆第2期 高校進学塾ごっこ（中2～中3）2

\* 準備物…高校受験用参考書・問題集

\* 面談頻度…週1回

\* 概要

中3まで全く登校していなかったため、A男の今後について、校長・担任の教師・進路指導の教師・保護者と4者面談を実施した。結論としては、学校は学校復帰、保護者は高校進学であった。A男自身の考えは、有名進学高校への進学だったが、有名進学校合格には遠く及ばなかった。

- ・初期…週1回の進学塾を開催して、有名進学校に合格する学力をつける学習
- ・中期…内申点作成と受験用模擬テスト受検のために中学校復帰へのテスト登校を週1回から始めて週3回まで実施した。その感想を週1回の進学塾ごっこの中で話した。
- ・後期…週1回の進学塾は継続して、高校受験と中学校卒業式のための復帰登校を続けた。

\* 所感

高校進学塾ごっこで成績はみるみる向上して有名進学校へ合格する。A男は元より、関係者は大変喜んでいたが、私は、A男の高校進学後の通学に不安を感じていた。

#### ☆第3期 自分探しの一人旅（高1～通信高校進学）2

\* 準備物…時刻表・地図

\* 面談頻度…週1回

\* 概要

高校進学後も来所面談は続いていた。一学期途中までは通学したが、休みがちになり、二学期に入り完全に不登校となる。程なく、「退学して、通信制高校へ入学する」とA男は話した。

- ・初期…再び紙上列車旅ゲームを実施する。
- ・中期…隣接県のテレビ局の公開録画見学のため一人で出かけたいと言うので、保護者と話し合い、近距離の一人旅を始めた。この旅行の感想を週1回の来所で話してくれた。
- ・後期…週1回の来所と近距離一人旅は頻繁になる。

\* 所感

一人旅に行ってきた翌週の相談では、とても元気で「もっと遠くまで行きたい」と話したが、遠距離旅行は紙上のみとした。

この時期に祖父が亡くなる。祖父は、母親がA男の送り迎えが出来ない時（不登校ぎみの弟が暴れて八つ当たりした際に、母親が階段から落ちて

足と胸にひびが入るほどの怪我をしていた時）、代わって送り迎えをしてくれた。A男が大好きな祖父であった。

母親に、A男に祖父の葬式の手伝いをさせることを指示した。人間の死、特に大切な人の死は、人間の生き方を考える心に繋がるので、祖父を送るようにと話した。

その後A男は、通信制高校進学を決め、翌年受験して、合格し入学する。

#### ☆第4期 旅行者ごっこ（通信高校2年～通信高校卒業）5

\* 準備物…時刻表・地図帳

\* 面談頻度…月1～2回

\* 概要

- ・初期…紙上列車旅ゲームを実施する。
- ・中期…18歳を過ぎたこともあり、一人旅のエリヤが拡大して関西・北陸あたりまで行った。旅行の感想を来所で話してくれた。
- ・後期…家族や私の宿泊を伴う私旅行の計画を業者顔負けの精度で作成できるようになった。月1回程度の来所となる。

\* 所感

通信制高校入学後の初期の頃は「宿題提出や体育の授業参加のためのスクーリング」に出られず、在籍6年程かかって卒業する。

旅行者ごっこは、私も含め多くの人に喜ばれたことが、本人的には結果として登校刺激になったと思われる。

#### ☆第5期 進学希望大学見学ツアー（通信卒業後2年間）2

\* 準備物…大学受験ガイドブック

\* 面談頻度…月～数か月に1回

\* 概要

- ・初期…大学受験用ガイドブックを見ながら質問や回答を繰り返すゲームを実施する。
- ・中期…行きたい学部や将来の仕事に関係の深い学部を探し、受験データを集めた。
- ・後期…大学受験勉強の為、来所相談は数か月に1回程度となる。

\* 所感

理系の学部を希望して合格する。国立・公立・私立の3校で迷うが、私立大学へ進学した。

#### ☆第6期 自分と同じ趣味の人探し（大学1年～6年）6

\* 準備物…パソコン・アニメ雑誌

\* 面談頻度…年に2回

\* 概要

- ・ 初期…アニメの制作（描画や収集）や同好会開催情報について、趣味を同じくする人々と連絡を取合う。
- ・ 中期…A男の書いたアニメを見せに来た。作品について語ることが多くなる。
- ・ 後期…東京（秋葉原）に、同じ趣味の人々が集まる会が開かれているので、参加するようになる。相談は半年に1回程度となる。

\* 所感

生き生きと自分の趣味や同じ趣味仲間の存在を語り自立できたように見えた。

#### ☆第7期 仕事探しツアー（大学卒業後2年間）2

\* 準備物…就職情報誌

\* 面談頻度…年に1回

\* 概要

- ・ アニメの制作関係の仕事に就職したかったが道が険しいことや人間関係に自信がないと話したので、就職情報誌でいろいろ探しては、その仕事について話をした。

\* 所感

人間関係調整力や集団適応力の不足が感じられたので、アルバイトや派遣社員で自分の得意分野のみで勝負することとなった。

#### ☆第8期 アルバイト体験から就職へ（現在）

\* 準備物…なし

\* 面談頻度…数年に1回

\* 概要

- ・ 訪問営業関係のアルバイト職員に就職する。
- 相談は2年に1回程度になった。

\* 所感

元気に頑張っていますと話していたが、正社員には自分から「まだ、なりたくない」と話すので、いつになるのかなと聞くと、「もうすぐ」と笑っていた。バイト先の人々や関係者との受け答えや挨拶も含め、適応力は向上しているように思えた。

## 5 考察〈まとめにかえて〉

### （1）各時期における対応の妥当性・有効性

#### ①第1期 紙上列車旅ゲームについて

A男の見立てが「優等生の兄として頑張り過ぎてきたことによる、中折れ疲れ型不登校」の仮説であったので、幼児がえり的な甘えを認容する遊戯療法的対応を選択したことは正しいと考える。特に、

A男の好きな「鉄道・列車」からの心のアプローチは有効であったと思われる。

#### ②第2期 高校進学塾ごっこについて

A男の学校関係者、特に学校長や担任教師は不登校の事実を進学予定校に理解してもらうための努力を惜しまなかった。治療者としての私もそれに連携呼応して、学力向上や登校刺激を進められたことが良かった。不登校生徒にとっての学力保障・学力向上・進学意欲は、学校復帰よりも将来のために必要な要素である。教育相談所と学校との連携の必要性や対応の重要性の好循環事例として確認できた。

#### ③第3期 自分探しの一人旅

高校進学後不登校になったが、引きこもりにならず外へ目を向けたこの遊戯療法的活動は、その後にとても良い影響を与えたと思われる。

通信高校進学へ方向へ自分自身で舵を取る原動力になったと思われる。

#### ④第4期 旅行業者ごっこ

この遊戯療法的活動は、その後の大学進学や自分と同じ趣味の仲間を探す活動に繋がるし、自分の存在感や役目を果たす人間としての価値に繋がるものとして有効であった。

#### ⑤第5期 進学希望大学見学ツアー

大学進学までの年数が、一般的な生徒より掛ったが、結果として、将来や自分の得意不得意を考えて大学を選んだので、ある程度自立できてから進学した活動に繋がり効果があったと思われる。

#### ⑥第6期 自分と同じ趣味の人探し

世界が広がり、自分の趣味と同じ仲間の存在に気付くことは、自分だけの殻に閉じこもらない大切な活動である。同年代の若者との会話は、集団適応や人間関係調整力に繋がるので有効と思われる。

#### ⑦第7期 仕事探しツアー

第5期の進学希望大学見学ツアーと同様に、不登校の生徒はインターシップや職場訪問を経験していないことが多い。A男に、この遊戯療法的な活動を実施しないと就職決定は、とても困難であると思われるので、実施は有効であると思われる。

#### ⑧第8期 アルバイト体験から就職へ

第7期の後を受けて、即就職でなく、ある種のインターシップを長期体験することは有効であると思

われる。人間関係調整力や集団適応力がアルバイトで育ってきたときに正式な就職をすることは、長い人生を考える時、とても有効であると考ええる。

## (2) 治療者と対象者の関係

遊戯療法的対応を実践するに当たっては、遊戯療法を構成する者を意識しなくてはならない。

治療者・対象者関係（クライアント・セラピスト関係）である。具体的には、「投影と転移について」と「治療者の逆転移について」である。

安島智子（日本遊戯療法研究会常任理事）は、その共著書「遊戯治療法の研究」（2000）で、「投影と転移」について、『遊戯療法の過程では、セラピスト（治療者）がクライアント（対象者）の投げかけてくる投影を受けとめることによって、クライアントの転移の感情が動き始め、しばしばその内なる物語は進展する。筆者もクライアントから向けられた「投影」や「転移」にハッと気づいたことによって、クライアントの葛藤や解決に向かうような経験をすることがある。』と述べている。また、「逆転移」について、『セラピストが自分自身に起きている逆転移を意識することは、遊戯療法においても相手を理解するうえで大事なことである。』とも述べている。

25年にわたる遊戯療法的対応の実践事例を述べてきたが、対象生徒のA男が私との関係で、転移を起こしたのではないと思われる事象があった。わたしの飲み干した缶ジュースの缶やA男の一人旅の見送りの際に買った駅の入場券を大切に持っていったことである。現在もA男は、保管しているのである。

また、私自身が逆転移を起こしたかもしれない事象としては、就職体験として実践したアルバイト先に、「無駄な配慮やお願い」をしたことがあった。

いずれにしても、私が治療者として前者も後者も意識できるレベルまでいっていない事実があり、治療者として未熟さを感じている。治療者が、意識レベルまでいっていないと、悪い意味の転移・逆転移に陥ってしまい、対象者の自己成長の妨げになってしまうかもしれない危険があると今も感じている。

## 参考・引用文献

- \* 日本遊戯療法研究会編『遊戯療法の研究』 安島智子著  
「第1章 遊戯療法を構成するもの」4～7頁 誠信書房、2000年
- \* 松原達哉編『シリーズ学校カウンセリングと生徒指導』③  
「学校・学級不適応に対応するカウンセリング」41～50頁  
学事出版、2000年
- \* 新井肇編『事例・データから学ぶ』「現場で役立つ生徒指導実践プログラム」22～31頁 学事出版、2011年
- \* 松本裕子著『お絵かき遊びで子ども心をはぐくむー学級において行う心理的アプローチの有効性ー』10～16頁  
三重大学教育学部附属教育実践総合センター 内地留学生研究報告書 2006年